

透析医のひとりごと

「私の中の偉人との出会い—回顧録—」 沼田 明

2018年香川県透析医会発足30周年記念医学会が開催されました。透析医としての原点である高松赤十字病院での勤務は私の原点でした。この年は、瀬戸大橋開通30周年、全国高校野球選手権100周年、全米プロゴルフ100周年でした。また、日本透析医学会50周年記念講演会が8月31日パレスホテル東京で行われた記念年でもありました。1968年5月人工透析研究会が発足し、1986年7月日本透析療法研究会に改められ、1993年11月社団法人日本透析医学会、2012年9月一般社団法人日本透析医学会となり、今日に至っています。

講演会場にいた私は、この歴史の中で、紆余屈折を経て社団法人へ改組されるに当たり、大変な難局を舵取りされた前川正信先生（故人）の功績が話題に出てこなかったことに少し寂しい気がした年でした。

徳島大学では、腎臓内科講座がなかった時代で、泌尿器科が血液透析の治療を受け持っていました。特に、西日本は当時透析に関しては、泌尿器科が診療にあっていた地域が多かった印象です。

透析医として、大きな転機になったのは1985年の高松赤十字病院への赴任で、約30年間在職することになりました。

泌尿器科領域はもちろん・慢性腎炎・維持透析（血液透析・腹膜透析）・腎移植と腎代替療法を中心に勤務しました。

当時、腎臓内科医もいなかった時代で、恩師今川章夫先生（故人）は、蛋白尿から移植までをスローガンに診療体系を構築していくことを念頭におかれていました。腎生検だけで終わるのでなく、病理組織の勉強に当時慶応大学の坂口弘教授の教室に医師を派遣されたり、腎生理学の勉強のため香川医科大学薬理学教室に医師を派遣されたり、一貫した教育を行っておられました。

私は、腎移植を立ち上げるために1987年、東京女子医大腎臓総合センターへ行くことになりました。太田和夫教授（故人）のもとで研修させていただくことになりました。教授および当時医局長をされていた高橋公太先生にお願いし、在籍中の医師の方同様、主治医として患者を持たせていただき、約6カ月間、東京女子医科大学腎臓病総合医療センターで研修させていただきました。主治医になったことにより術前・術後管理の細かなところまで学ぶことができました。当時、腎臓病総合センターは、太田教授を筆頭にそうそうたるメンバーが在籍されていました。阿岸鉄三先生・東間紘先生・寺岡慧先生・高橋先生等の仕事を身近にし、ご教授いただいたことが、その後の人生を大きく変える引き金になりました。

その後も泌尿器科医が慢性腎炎・血液浄化法・腎移植と一貫した腎疾患の治療に専念できたことは、人生

の幸せとと思っているこの頃です。

腎代替療法に関する学会への太田先生の功績は、計り知れないものがあります。

1996年透析バスキュラーアクセスインターベンション治療医学会（VAIVT研究会）発足。天野泉先生を中心に活発な学会活動が行われています。透析医だけでなく、循環器科・放射線科など従来透析に従事されていなかった先生方を透析治療への関心を持っていただいた学会の発足でした。

一方、日本透析医会主催の「アクセス研究会」が開始されたのは1989年で、1995年の第7回まで継続されています。その後、維持透析におけるアクセスの重要性を鑑み、この領域を特化して論じる場として川西秀樹先生、水口潤先生が太田先生に働きかけ、1996年に「日本アクセス研究会」が発足し、第1回研究会を香川県高松市で開催しました。

当時は、各地域において、アクセスを専門にやられていた先生方は少なく、各地域の底上げも目的としていました。2009年8月24日「特定非営利活動法人日本アクセス研究会」として承認され、現在では日本透析アクセス医学会として新たな一歩を踏み出しています。

血管内治療の歴史をふり返ると、ドイツの放射線科医 Andreas Gruntzig は1974年下肢虚血に、1980年シヤント狭窄にPTAを用いられました。さらに1990年代になると経皮的血栓溶解法・経皮的血栓吸引法が開発され、閉塞病変に応用されました。血管内治療は近年、バスキュラーアクセス診療の主流になっています。

一方、1992年6月13日 透析患者にかかわる外科治療の円滑な施行を目的に日本腎不全外科学会が発足しました。当時透析患者は、12万4,000人でした。特に全身麻酔下での手術に難色を示されている施設が多い時代でした。これまで透析患者への積極的治療が試みられなかった時期、学会を通じ、整形外科・麻酔科・眼科・循環器外科など他科の先生にご参加いただき、透析患者だからという概念を変えることができ、一般患者同様手術が行われるようになりました。

太田先生には、研究会・学科においても中心で活躍できるようお声がけいただきました。先生に満足いただけるような活躍もできていませんが、私には身に余る光栄でした。これらの学会・研究会を立ち上げるに当たり、太田先生は、大平整爾先生（故人）を信頼され、大平先生を頼られていたように私には見えました。太田先生の逝去後、これらの研究会・学会は大平先生に受け継がれ、私どもを導いてくれ、その後の発展に繋がっています。

一方、大平先生は、これまであまり触れられなかった末期腎不全患者や維持透析の離脱や透析患者の透析の拒否権や終末期治療に関する考え方など当時、日本透析医学会で問題になっていた案件について、第60回日本透析医学会特別講演にて「豊かな生の総仕上げを目指して」で総括されました。医師としての倫理観を教わりました。

太田先生は、晩年 US 腎の問題で読売新聞にたたかれ、これまでの功績を踏みにじられるようなこともあ

り、一時元気をなくされているような時期もあったようです。高橋先生のご尽力により太田先生を励ます会を行ったとき、全国各地で移植医として第一線でご活躍されている先生方が、某温泉に集結されました。太田先生から、諸大学の壁をこえ、恩恵を賜った医師の多さに今さらながら驚嘆している次第です。初年度で終わるつもりが、数回にわたり行われました。本当に楽しそうな笑顔だったことを思い出します。一方、慢性腎不全の治療は、多職種（薬剤師・看護師・技師等）にわたる総合的な治療であり、専門性を持った職種での治療が必要であることを東京女子医大教授時代からお考えを持っておられ、その後腎不全看護学会・臨床工学技士の学会発足に資金提供までされ、透析治療のスタッフの育成にも力を注がれました。

今日の腎代替療法を医師だけでなく多職種とともに行うようにし、全国の腎代替療法の底上げを行われた最大の功労者と思っています。

来年、後期高齢者の仲間入りする年齢になり、先人達の意味を継承できるか自問自答しているこの頃ですが、もう少し頑張ってみようと思っています。

高知高須病院名誉院長（高知県）